



工場の入り口にある\$360,000の
コンバインは圧巻!



案内係は日本人が好きだと言っていた。はい、私も金髪・ブルーアイが好きです。

特別
企画

ヒール宮井の ジョンディア・コンバイン 工場見学

巷間で大流行の工場見学。ヒール宮井こと宮井能雅氏も今年1月、米国イリノイ州にあるジョンディアのトラクター製造工場を訪問した。日本一のジョンディアユーザーの声もあるヒール宮井氏が現地で見たものとは何か？

(取材・文・撮影/宮井能雅)



工場見学のヒトコマ。



ハイテクの工作機、両手でスイッチを押すのは当たり前。



Welcome

John Deere Customers & Visitors

Visitor Hours:
6:45am-3:30pm

Public Tour Times:
Monday-Friday 9:30am or 1:00pm
(Reservations Required)

To Schedule A Tour:
319-292-5347 or 319-292-7668

-Must be 13 years of age or older
-No open toe shoes allowed
-No cameras or cell phones allowed on public tours

ビジターは早朝から受付してもらえる。米国人は働き者だ。

ルイビル・ファームショーにて。
 ジョントディアの
 自走スプレーヤー。
 私も来年使います。



ルイビル・ファームショーにて。
 いくらジョントディアでも、
 ちょっと無理がある感じ。



これがプランター・ユニットだ！



ルイビル・ファームショーにて。ヤンマーさん、
 ジョントディアと話し合いをしましょうね。



ジョントディアの
 キャビンの操作は
 フィンガーテクが必要だ。

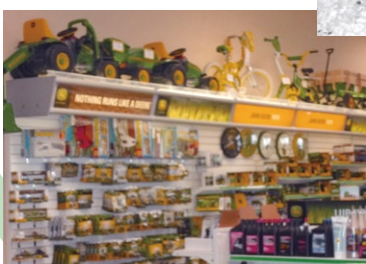


米国ツアーを語り合う、
 岩見沢、福井、長沼の生産者たち。

このブレードで
 土を引き裂いてゆく。



ミニカーなどの
 グッズがいっぱい。



B-17
 (第二次世界大戦時に
 活躍した米軍の
 主力大型爆撃機)から
 機銃を撃つヒール宮井。

イリノイ州イースト・モリーオンにあるジョンディア・コンバイン工場には8年ぶり、今回で5回目の訪問だ。以前はすぐ近くにケース・コンバインの工場もあったが米国・日本が低温であった93年にミシシッピ川の洪水で工場にも被害がありその後、数年経って他の州に移転してしまっただけで、日本のメディアではあまり報道されていないが、2008年に引き続き、昨年末からの降雪量の増加で、雪解けが始まった今年の4・5月にもこのミシシッピ川流域で洪水があり、その冠水した面積はイタリヤの国土に匹敵するのだから大変なことになっていて、事実、作付け等に影響が出てきている様で、その結果、穀物価格高騰の理由のひとつになっているらしい。

ゲスト用カウンターには金髪・ブルーアイが日本人農家を笑顔で迎えてくれた。そのカウンターの横には500馬力のコンバインが展示されていたが、今年の6月には最新型のモデルが販売されたとか。私もほぼ同じサイズのジョンディア・コンバインを持っているが、360馬力しかない。10年前にオーダーする時には「米国で一番デカくて、馬力のあのだが、翌年にはさらに進化した460馬力のモデルが登場してしまい

自慢できなくなりました。ジョンディア・コンバイン、トラクターはおよそ5年でモデルチェンジを繰り返しているようだ。近い将来は現在の車軸が2軸から3軸になり、穀物を20t搭載できるコンバインが登場して、そのエンジンは1000馬力なんてことになるとは思えない。

工場ツアーでは芝刈り機の後ろにツアー客が乗るカートをけん引して90分ほど案内していただき、最後に「年間の生産台数は？」と聞いてみた。すると「必要な分だけ」と面白い答え方をした。聞くところによると昨年からの生産台数は企業秘密になり、以前は動画もOKだったが、写真のみになってしまう。隠すほどハイテクなのか？と思われるだろうが、そうでもない。

比較するのに面白い話がある。15年ほど前に先ほどのケース・コンバイン工場に見学ツアーに行くことになった。日本製の溶接、切断、加工ロボットがスターウォーズのR2D2の様に動き回っていた。それに引きかえジョンディア・コンバイン工場では労働者が溶接していたし、その煙が充満していた。決定的な違いは、床であった。ケース工場はハ

進化を続けるジョンディア・コンバインの秘密とは

イテクマシンの使っていたが、床にはガムやゴミがいたるところに散乱していた。ジョンディア工場では大げさな言い方だが、床にはゴミひとつ落ちていない。日本でも、初対面の相手の評価に服装だけではなく「履いている靴の手入れを見なさい」と言う話を聞く。やはり足元がしっかりしているということは日頃の仕事に対する姿勢なのだろうと、この米国の大地でも認識させられることになった。

誤解してもらっては困るが、だからと言ってケースのコンバインの品質が悪いという話ではない。ジョンディア・コンバインと似たようなシンドルのスレッシング・シリンドラではあるが、ケースの方が大豆の選別が良いという話を現地の農家から聞いたことがあるくらい、優秀なメイドインUSAの製品である。

その後、ケンタッキー州ルイビルで行われたファームショーに行き、2年ぶりに訪れる最新式ハイテクマシンとご多面することになった。今回はどうしても見たい機械があった。それはジョンディア製GPS対応オート・ステアリング（180度回転可能な自動操縦）の自走スプレ

ーヤーである。私の農場では同じ米国製ではあるが、現在ケースに買収された自走スプレヤーを使っている。スプレータンクは2700Lと小さく、購入後9年経つのでそろそろ新しいものを購入したいと思っていたが、湿地対応にするために600mmのタイヤの装着を考えているので、ホイールのオフセットの改造のリスクを考慮して、購入前に現物を見ておくことにした。

イセキ、クボタの日本製トラクターは20年前まではガーデン用として販売していたが、その後、道路工事車両として実績を上げ、今では米国農業に大いに貢献するようになり、同じ国産メーカーであるミツビシやヤンマーのエンジンを搭載した米国ブランドの小型トラクターにも注目が集まったが、やはり日本ブランドのトラクターを米国市場で単純に競争するのは難しいと見えて、米国のトラクター会社と提携を結ぶのは正しい判断だろう。しかし、よくヤンマーと提携関係になるジョンディアがヤンマーエンジン他社ブランドで販売することを許したのか不思議である。もしかしたらヤンマーがジョンディアを無視したのか、それとも日本メーカーは将来を見据えて米国のトラクター業界で新しい動きを見せるのか。